コワモテ消防士は
ウブな先生を身籠らせたい

にしのムラサキ
Murasaki Nishino

Eternity
BUNKO

目次

コワモテ消防士はウブな先生を身籠らせたい　5
幸福　323
書き下ろし番外編
普通の毎日　329

コワモテ消防士は
ウブな先生を身籠らせたい

プロローグ

ごくごくとグラスの麦茶を飲み込むたびに、彼の喉仏が僅かに動く。グラスを持つ手は大きく、筋張っていて、触れると硬い。爪が綺麗に切り揃えてあるのは、彼の消防士という仕事ゆえだろう。

カーテンの向こうに、初夏の朝日を感じる。

布一枚に柔らかく遮られながら射し込む陽の光で、彼の逞しい筋肉の陰影が浮き彫りになった。

視線に気がついたのか、上半身裸の彼——鮫川亮平くんがその精悍な眼差しを私に向ける。

百九十センチ近い長身の彼が三十センチ以上も下にいる私を見るとき、普通ならきっと、見下ろされ睨まれているような威圧感を感じるのだと思う。ただでさえ、彼は強面なのだ。

けれど、彼からそんなもの、一度だって感じたことはなかった。

あるのは、ただひたすら胸がときめく不思議な安心感で——

この感情の名前に、私はまだ名前がつけられていない。

「紬さん」

低くて穏やかな声。

半裸の彼が近づいてきて、ベッドに横たわる私の頭を撫でた。

「起きましたか？」

「……ん」

肉厚な、働く男性の手だった。擦り寄ると、柔らかく頬をくすぐられる。

六つも年下の彼に私はすっかり絆されて、「半年」という期限付きとはいえ彼の恋人になってしまった。

「足、大丈夫ですか」

「うん平気」

彼はいつも私の足を気にしてくれている。骨折して松葉杖に頼っていた足首は今はもうギプスも取れて、サポーターだけでなんとかなっていた。

そもそも、この怪我の原因となった事故から助けてくれたのは、亮平くんだったのだ。

でもそれは私たちの出会いじゃない。

もっと前——彼がまだ高校生だった頃、私たちは出会った。

私は彼を子供だと思っていて。
彼は私を女として見ていた。
そのことを知ったのは、つい最近なのだけれど――
「大丈夫そうなら」
ぎしり、とベッドが軋(きし)む。
私の部屋にあるこのベッドはシングルで、ただ眠れればいいやと適当に買った量販品。
亮平くんが乗るとベッドは狭いし、彼の脚ははみ出ちゃう。でも彼は全く気にすることなく私を組み敷くし、抱くし、腕の中に閉じ込めて眠る。
ぼんやりと、私の頭の横に手をついて覗き込む端整な強面(こわもて)を見つめた。
優しくて、穏やかな視線……の中に、ぐるぐる絡みついて隠せていない情欲を見つけ、お腹の奥がキュンと疼(うず)く。
「元気だよね……」
「紬さんが元気にしてるんですよ、俺のこと」
彼はそう言いのけて、薄がけの布団を剥(は)ぎ取った。私は慌てて胸を押さえる。
昨夜の――いや、明け方まで続いた情事のあと、私はそのまま眠ってしまっていた。
ゆえに、下着一枚、身につけていなくて……
「隠さないでください」

綺麗だから、と亮平くんは言う。
「やだよ恥ずかしい……」
「恥ずかしがるのがいいのに」
むっと唇を尖(とが)らせると、キスが落ちてくる。そのまま脚を開かれた。
「ひゃ……っ」
「ほら、まだ濡れてる」
唇を離した亮平くんが私の膝裏に手を入れて大きく開かせながら、その付け根をじっと見つめて言った。
「ゃ、見ないで……っ」
「胸が恥ずかしいんですよね？　ならそこは隠したままでいいので」
「ちがっ」
慌てて片手で隠そうとすると、ふとその手を取られた。
そして……私の指を一本、私のナカに押し込む。
「……っ!?」
慌てて引き抜こうとするけれど、さらに一本、今度は亮平くんの太い指が入ってきて、ぐうっと押さえ込まれて抜け出せない。
「下手に動かすと傷つきますよ」

「りょ、亮平くんっ、やめっ」
「嫌です」
亮平くんが指を動かし始める。というか、正確にはぐっ、ぐっ、と私の指を押している。その指腹が触れているのは、私が感じてしまう浅い場所で、漏れそうな悲鳴を必死で堪えた。
勝手に快楽が湧き上がる。
自分の指に、肉襞が絡むのが分かる。
「ぁ、やだっ、こんなっ」
「紬さんのナカ、こんなに素敵なんだって知っててほしくて」
「ぁ、ぁあっ、やめっ」
「紬さん、気持ち良さそうで嬉しいです」
彼は僅かにしか指を動かしていないのに――私は小さな悦楽を拾っては高く啼いてしまう。
「う、ぁあっ、あっ」
「イきそうですか？」
「ぁ、あっ、あっ」
やだ、と理性で思う。自分の指でイくだなんて……っ。

「やだぁ……っ」
ぽろっと涙が零れた瞬間、甘く快楽が弾けた。ナカの肉厚な粘膜が、ギューッと亮平くんの指ごと私の指を締め付ける。
「う、あ……」
「かわいい、紬さん」
うっとりした口調で亮平くんは囁く。
少しぼんやりした頭で考えたのは、さっきの亮平くんの台詞――『恥ずかしがるのがいいのに』。要は恥ずかしがる私を見たかったらしい。
だからと言って、こんなのはひどい。
一生懸命に彼を睨むと、亮平くんはちょっとおろおろしながら何度も私の顔にキスを落としてきた。
「すみません、紬さんがかわいすぎて、その……意地悪したくなりました」
あまりにも真っ直ぐにそんなことを言うから、つい笑ってしまう。どうしてだろう、私は彼が何をしても許してしまう。
「紬さん。大好きです、愛してます」
大きな手で私の両頬を包み込み、彼は何度もそう繰り返す。
「ん……」

キスされるたびに心地よくて、私は目を細めた。
ふと、考える――
半年後、私はこの温もりがなくなっても生きていけるのだろうか？
私の全部を肯定して、愛してると包み込んでくれる年下の大きな彼。彼なくして、私は――
その一方で、頭の中の冷静な誰かが言う。
きっと半年もしないうちに、若くて端整な彼は私に飽きてしまうだろう。他に素敵な女の子を見つけて、どこかへ行ってしまうに違いない。
残酷だなあ、と今は情熱でいっぱいの彼の瞳を見上げた。まつ毛が触れ合いそうな至近距離で、彼が私の名前を呼ぶ。
「紬さん」
そうして唇が重なって、大きな手が私の乳房を揉みしだく。先端を押し込むように強く、かと思えば触れるだけのようにやわく。
「ぁ、ぅあっ」
「紬さんの、触ってるだけで気持ちいいです」
亮平くんは唇を離し、そんなことを言って先端を指で弾いた。
「は、ぁ……っ！」

思わず嬌声が上がる。亮平くんは先端をむにむにと指で弄ぶ。潰したり、先っぽを爪で僅かに引っ掻いたり、指の腹で優しく撫でたり。
亮平くんが身体をずらし、指で苛められコリコリに勃った乳房の先端を口に含んだ。
「ぁあんっ」
亮平くんの、あったかな口の中でしゃぶられる先端。柔らかく甘噛みされたかと思えば強く吸われ、舌先で突かれしごかれて……私は彼の髪に指を絡ませ、ただひたすら喘ぐことしかできない。
気持ちいい、と甘えた声が口から零れ落ちる。
「気持ちいい、気持ちいい……っ」
亮平くんが微かに笑った気配。少し強く噛まれて、私は身体をくねらせた。
そのうちに、とっくにトロトロになった入り口に指が何本か、入ってくる。いきなりバラバラに動かされて、私は半分悲鳴のような声を上げて彼にしがみついた。
「ゃ、っ、だめっ、亮平く……っ！」
「紬さんのナカ、エグいくらい締め付けてきてんの分かりますか」
ビクビクと彼の指に吸い付いて肉襞が震える。痙攣する粘膜は、蕩けながら奥へ、奥へと蠕動する。
「りょ、へー……くんっ、も、お願い……」

私は速い呼吸を繰り返しながら嘆願する。
「お願い？」
亮平くんはぐちゅぐちゅと指でナカを蹂躙しながら、情欲で目をギラギラさせているくせに、声だけは穏やかに聞き返す。
「お願いってなんですか」
「は、ぁ……んっ、いれ、てっ」
「何を？」
心底不思議そうに彼は言う。
「指、挿れてあげてるじゃないですか、気持ちいいってかわいく甘えてきてますよ」
「いじわる……っ」
思わずそう言うと、亮平くんの首がふわりと赤くなる。情欲と興奮が入り交じった、男の顔をして亮平くんは眉根を寄せた。
「……そんなかわいい顔で言われたら、我慢できないじゃないですか」
「我慢しないで……」
「もっと苛めたかったのに」
やっぱり苛めたかったらしい。
じとりと睨むと、目元にキスを落として彼は私から指を抜く。

それから部屋着のハーフパンツを下着ごと脱いだ。大きな身体に見合った、最初は入るのか不安になった屹立はもうお腹につかんばかりに熱を孕み、先端から露を零している。
見た瞬間に、きゅうんと子宮が疼いた。
欲しい、と肉襞がわななく。
亮平くんはすっかり慣れた手つきでコンドームを装着しながら、片方の唇の端を上げてにやりと笑った。
「入り口、ぱくぱくしてますよ」
「……っ、言わない、でぇ……っ」
「かわい……」
亮平くんはそう囁きながら、私の太ももを押し上げる。
「俺のこと欲しがってくれてる紬さん、ほんっとかわいい」
彼の屹立の、肉ばった先端が入り口にぬぷっと沈み込む。それだけで腰に甘い快感が広がった。
「う、あ……っ」
「紬さん、大好きです」
そんな少し掠れた声と一緒に、最奥を大きく、硬い熱が一気に貫く。

声も出せずにイった私を、大きな手が何度も撫でた。
「そろそろ理解したんじゃないですか」
何を、となんとか亮平くんに目をやる私に、彼は言った。
「俺が男だって――」
言いながら、とん、とん、と奥を突き上げられる。私は彼の動きに合わせ、ただ喘ぐ。
それしかできない。
頭の芯まで快楽で蕩けさせられて、ねじ伏せられて、ただ、淫らな声をだらしなく漏らす。
そんな私を見下ろして、彼は続けた。
「なあ紬さん」
子宮を潰さんばかりに、屹立でぐりぐりと最奥を押し上げ、彼は笑った。
「俺、もう子供じゃないですよ」

第一章

鼓膜が破れるかと思うほどの轟音だった。反転する視界を真っ赤な夕陽が滑ってい

く――震え落ちる寸前の、線香花火のようなそれ。
痛みは遅れてやってきた。
全身が痛い。ぼやける思考の中、指先まで痺れる。口の中で広がる鉄の味に、ようやく意識が浮上した。
「紬」
友人の呼びかけに混乱しつつ目を開く。
視界いっぱいに広がったのは、ぐちゃぐちゃになった高速バスの車内。アスファルトが焦げたようなにおいがした。
「真咲……？　何、これ」
「事故、だと思う」
真咲の言葉にゆっくりと現実を理解していく。
「事故……？」
「うん。何があったかは分かんないけど……ッ、紬っ、脚！」
「え？」
焦燥を滲ませる真咲の声で、自分の右脚に目を向けた。前の座席が信じられない角度にひしゃげ、そこに私の脚が……巻き込まれていた。
「――ッ！」

さっきまで僅かに熱さを感じるだけだった右脚に、一気に激痛が走る。思わず叫んだ私の手を真咲が握った。

「ごっ、ごめん、紬、あたしが余計なこと……っ」

「ううんっ、いいのっ」

そう答えつつ、痛みを誤魔化すためにあたりを見回す。真咲だって怖いだろうに、心配をかけたくなかった。

満員ではなかった、栃木―神奈川間の高速バスの車内。女子大時代の同級生の結婚祝いに、同じく同級生の真咲と宇都宮へ向かったのは今朝のこと。お祝いついでに大きな公園の桜を満喫し、二時間ほど前に帰路についたのだった。

一日中歩き回り、すっかり疲れていた私たちはバスに乗り込むやいなや眠りこけた。そうして今、轟音に目覚めたということなのだけれど……

改めて、ひしゃげた前の座席にゾッとする。誰も座っていなかったからまだ良かったけれど、もし乗っていたら……

「お客さま、みなさんご無事ですか！」

運転士さんが、額から血を流しつつ叫ぶ。私たちの斜め前に座っていたスーツ姿の中年の男性が「何があったんだ！」と語気荒く詰め寄った。

「トラックの横転に巻き込まれたみたいで……！」

「トラックぅ？　うわ、本当だ」

車内がざわついた。

雰囲気的に、どうやら意識がない人やどうしても動けない人はいないようだった。

……私以外は。

「警察と消防には連絡してありますので……お、お客さま！」

車内を歩いてきた運転士さんの顔から血の気が引く。真咲が涙声で運転士さんに訴えた。

「助けて。この子、脚が挟まって動けないの」

「くそ、どうにか椅子が動けば……」

「運転士さん怪我してるだろ、手伝うよ」

さっきのスーツの男性まで出てきてなんとかしようとしてくれるけれど、全く動かない。

「あのっ、大丈夫です、私」

「何言ってんだ、大丈夫じゃないだろ」

「でもみなさんもお怪我を……」

そう言いかけたときだった。

遠くからサイレンが聞こえてくる。これは、パトカー？　それとも……

サイレンが近くで止まる。そうしてバスに乗り込んできたのは、オレンジ色の制服を着た消防士さんだった。白いヘルメットを被って、白い肘当てと膝当てをつけている。レスキュー隊員さん、と言ったほうが正確なのかな、と痛みでジンジンする意識の中で考える。

「お怪我は！　意識がない人はいますか！」

低く、よく通る声だった。

「お客さまみなさん意識はあるのですが、この方が！」

運転士さんの言葉に、レスキュー隊員さんが大柄な身体を斜めにして通路を歩き、私のそばまでやってくる。

「脚か……大丈夫です、すぐに助けますからね」

私の足元に片膝をつき顔を上げた男性――の顔に、私は見覚えがあった。こんなときなのに、呑気に名前を呟いてしまう。

「鮫川くん」

「……紬先生」

視線が交差する。

精悍な大人の男性になった鮫川くんの顔を見つめながら、私は彼が高校生だった六年前のことを思い返していた。

＊　＊　＊

私が新卒で就職したのは、とある予備校の進路指導チューターだった。

そこでとあるクラスの担任から『あいつなあ……よく分からんから話聞いてやってくれ』と頼まれたのが、当時高校二年生の彼、鮫川亮平くんだった。

鮫川くんは予備校では有名人だった。

本人の成績もさることながら、お兄さんふたりも超優秀。それぞれ東大と防大へ進んだとかで、当然のようにどの講師もスタッフも彼は大学へ進学するものだと疑ってすらいなかった。

『東大か、京大……とにかくレベルの高い大学を志望させるように』

それが上から出ていた指示だった。

『えっと、今学期からチューターを担当することになった岩瀬紬です。よろしくね』

『……はい。よろしくお願いします』

『さっそくだけど、志望校はどこかな？　どっかイメージしてる？』

指導室で机を挟んで向かい合う私の言葉に、鮫川くんはすっと目線を逸らして窓の外を見る。満開のソメイヨシノが春の日差しを受けてきらきらと輝いていた。

『鮫川くん？』
鮫川くんが視線を戻す。背が高い上に背筋を伸ばしているから、高校生とは思えない威圧感があった。変声してすぐとは思えない、大人みたいに落ち着いた声で、彼は言う。
『特には』
『え？』
『どこでもいいです。受けろって言われたところ、受けます』
それで、最初の面談は終わった。正直なところ、頭を抱えたい気分だった。
自分の意思がないわけじゃない……のだと思う。お兄さんふたりの経歴がプレッシャー？
とりあえず私は鮫川くんとの距離を縮めることにした。面談や、それ以外でも彼を見かければ声をかけた。
『何読んでるの？』
『音楽とか何聴くの？』
『部活はなぁに？』
『得意科目は物理みたいだけど、好きなのは？』
『お兄さんとは遊んだりするの』
とにかく質問攻め。

もしかしたらウザがられるかもしれないと怯えつつ、それでも少しずつ鮫川くんはこちらに心を開いてくれた。
入梅したとは思えない、とある晴天の日。私は授業前の鮫川くんを見かけて声をかけた。
『あ、また宮沢賢治読んでるの。好きだね』
『兄が好きで』
『鮫川くんは好きな本はないの？』
『俺は』
鮫川くんは口を開きかけて、すぐに噤んだ。それから言葉を続ける。
『――特には。紬先生は』
鮫川くんが文庫本に向けていた視線をこちらに移す。
『先生は、何が好きですか』
『私？　私はね、そうだな、シャーロックホームズ』
『ああ、小学生のときに読みました』
『あのねっ』
思わず、私はずいっと鮫川くんに詰め寄った。
『子供向けじゃないやつで読んでみて！　違うから！』

『……違いますか』
『全然！　違うから！』
力説する私をしばらく見つめたあと、鮫川くんは噴き出した。私は目を丸くする――
鮫川くん、こんなふうに笑うの！
『っ、すみません……先生がすごい必死だったんで』
私はすっかり嬉しくなる。
数ヶ月かけてやっと距離が縮んだって、飛び跳ねたくなった。

それから少しして、鮫川くんが「これが俺の好きな本です」と言って貸してくれたのは、小説でも漫画でもなく、小さな子供向けの絵本だった。
『わ、ありがとう！　大切に読むね』
帰宅してすぐに開いた優しい絵柄の絵本の主人公は、消防車。街や山や工場の火事を消して回る消防車の健気（けなげ）な姿に、ついジンとしてしまった。
『よほど好きなんだねー……』
ページのヨレや、テープで丁寧に補修されている少し破けた箇所。大切に、でも何年にもわたって何回も何回も読んできたのだろうこの絵本。
そうして気がつく。

これは無口な彼なりに、何か伝えようとしているんじゃないかって。
『鮫川くんは……消防士さんになりたいの？』
進路指導室、向かい合った机でそう聞くと、鮫川くんはしばらく黙ったあと頷（うなず）いた。
『高校出てすぐが、最短かなと思っています』
淡々と告げて、鮫川くんの視線はまた窓の外へ。
ソメイヨシノはその柔らかな花びらを全て落とし、代わりに真夏に映（は）える濃緑の葉を茂らせていた。その枝に掴まり、蝉（せみ）が鳴く。
『そう。じゃあ、系列の予備校の、公務員受験コースへの変更手続き……』
『先生』
鮫川くんが慌てた声で呼んだ。
『いいんですか。俺のこと、大学に行かせなくて』
『え……、なんで？　あ、もしかして親御さんは進学を希望されてるの？』
そこはちゃんと話し合わなきゃ、と私は頭でスケジュールを確認する。三者面談の日、いつにしよう？　確か鮫川くんのお母さんは専業主婦だから、ある程度時間に融通が……ああいや、鮫川くんは弟がふたりいるんだっけ。五人兄弟か、だとしたら相当お忙しいなあ。今から一度電話して……と算段を進めていた私に、鮫川くんは首を振った。
『それは……違います。多分、親は言えば納得してくれると……割と放任主義で』

『じゃあ何が問題？』
首を傾げた私に、鮫川くんは言う。
『……裏切っていいのかと』
『裏切る？』
彼は頷いた。
『俺もずっと、漠然と進学すると思ってました。でもいざ将来のことを考えたら、やりたいこともなりたいものも、消防士しかなかった。大学に行くのは、ただの遠回りになる気がして……。親も、学校も、予備校の先生も……みんな俺が進学すると思ってます。ここの授業料だってバカにならないし、うちは兄弟多くて大変なのに出してもらって……なのに、急にやめる、って申し訳なくて』
『大事なのはさ』
私はこっそり用意していた資料を机の上に並べつつ続けた。
『鮫川くんがどうしたいかだよ。鮫川くんの人生なんだから。大学行って消防士さんになってもいいし、いざ進学したら考え変わるかもしれないし、未来のことなんか誰にも分かんないからね』
『……これは』
『公務員試験の資料。あとこっちは高卒と大卒の消防士さんのお給料とか昇進の

データ』
鮫川くんは真剣な顔でそれを読み込み、『もう少しだけ、悩みます』と頭を下げて指導室を出ていった。
それから少しあとのこと。
指導室近くの自販機スペースでたまたま鮫川くんに会い、しばらく立ち話をした。
こちらから公務員試験の話を振るのはやめておいて、雑談だけに留めた。あまり焦らせても良くない気がしたのだ。
『……それでね、明日引っ越しなの』
『荷物とか大変じゃないですか。……その、良ければ、手伝いましょうか』
真剣な鮫川くんの顔に、優しい子だなと眉尻を下げた。
『ありがとう。でも鮫川くんだって試験前でしょう？　大丈夫、彼氏が来てくれることになってるの』
鮫川くんが僅かに目を瞠る。それから『はい』と頷いた。
『なら安心ですね』
そう彼が真っ直ぐに言ったときだった――突然鳴り響いた大きなベルの音。
『え』
次の瞬間には、防火シャッターがゆっくりと下り始めた。同時に火災発生の放送が

入る。
反射的に『出なきゃ！』と焦った私は、足をもつれさせて転んでしまう。
『紬先生！』
鮫川くんが助け起こしてくれたときには、防火シャッターはほとんど下り切っていた。僅かな隙間が残っているのは、誤作動か何かなのだろうか。
『ご、ごめんなさい』
『いえ』
そう言いながら顔を上げた鮫川くんが眉根を寄せた。その視線の先に目をやり、私は悲鳴を上げそうになった――だって、シャッターの横にあるはずの手動扉が、自販機で塞がれていたから。
『これって……閉じ込められた？』
鳴り響くベルの音に恐怖を覚えてへなっと座り込む私を壁に寄りかからせ、鮫川くんがシャッターを開けようとする。がしゃん！　という音が響くものの、開く気配はない。その大きな音にハッとした私も立ち上がって手伝うけれど、全く動かなかった。
『おい！　大丈夫か』
シャッターの向こうから上司の声がした。
『っ、はい！　なんか、勝手に閉まって』

上司も反対側から開けてくれようとするものの、全く動かない。そのうちに彼が咳き込んだ。
『電気設備か何か分からんが、急に火が出たんだ。煙が……っ』
『先生、先に逃げてください』
鮫川くんがキッパリと言う。
『煙が一番やばいんです』
上司は何かを言おうとして、それから『すぐに消防が来るはずだから！』と立ち去る足音がした。
煙がシャッター下の隙間から入り込んでくる。私は目を丸くして悲鳴を呑み込んだ。
シャッターの前を離れ、鮫川くんが窓を開いた。私も窓の外を見る。高さは二階。
『鮫川くん、逃げて』
私は呟くように言った。その間にも、黒い煙は私たちがいる空間に充満しようとしていた。
『私も最悪、飛び下りるから。鮫川くんひとりならなんとか下りられるんじゃないの？』
下には幸い、駐輪場の屋根がある。金属製だから突き破って落ちることはないだろう。打ちどころが悪くないことを祈るしかないけれど……
鮫川くんは首を振った。

『ダメです』
『なんで』
『紬先生置いていけないです』
私はぽかんと彼を見つめた。
『そんな場合じゃないでしょう』
『どんな場合でも』
鮫川くんは淡々と言う。
『誰かを置いて逃げたら、俺はもう何者にもなれない気がする』
瞳の奥に、真っ直ぐな意志があった。
その言葉に、彼の肚は決まりかけていたのだと悟る。
『そっか』
私は頷いて、鮫川くんより先に窓のさんに足をかけた。煙の量が増えているせいか、軽く咳き込む。
『置いていけないなら、私、先に行く』
そう言うと、鮫川くんがハッとした顔で私を見て、『紬先生』と呟いた。
『大丈夫、多分駐輪場まで跳べる』
正直なところ、めちゃくちゃ怖い。私の脚力であそこまでジャンプできる？　飛べな

かったらアスファルトに落ちる——たった二階分の高さなのに脚が震えた。ばちんと脚を叩きつけ、息を吐く。その息さえ震えていた。
でも、ここで時間を使うわけにはいかない。鮫川くんを巻き込んでしまう。
『先生』
鮫川くんが私の肩を引いた。
『俺、先に行きます。それで、絶対受け止めるから跳んでください』
真っ直ぐな目が、私を捉えていた。
『……分かった』
場所を鮫川くんに譲ると、一切の躊躇なく彼は駐輪場の屋根に飛び下りる。
軽やかに着地し、私に向かって腕を広げた。
『先生』
鮫川くんを見つめる。
窓の枠を持つ手が震えた。
『先生！』
『わ、分かってる』
煙の量が増えている。
明らかな熱を感じて振り向くと、天井が燃えていた。唇がわななく。意図せずに涙が

零れた。

『う……』

『紬！』

眼下で鮫川くんが怒鳴った。

ハッとして彼を見る。駐輪場の屋根の上、仁王立ちになってこっちに手を広げていた。

『来い！』

ほとんど反射的に、私は窓から身を乗り出し、さんを足で蹴る。

彼に向かって——

背後でぼふっと炎が煙を吐き出した。

鮫川くんに迎え入れられるように軽々と抱き留められる。その力強さに驚くと同時に、掻き抱くようにその腕の中に閉じ込められた。

どっどっどっ、と激しく心臓が音を立てていた。私のものか、鮫川くんのものか。

ありがとう、と彼の腕の中でその顔を見上げる。

鮫川くんは建物のほうを見ていた。

彼の顔に浮かんでいたのは、助かった安堵ではなかった。色んな感情がないまぜになったその表情に、私は思う。

——彼はいい消防士さんになるだろう。

サイレンが近づいてくる。

赤色灯がくるくると回る。

＊　＊　＊

その赤を、その音を聞いていたときのことを、私は大人になった彼の横顔を見ながら思い出した。

ゆっくりと緊張が解けていく。

もちろん、まだ痛みはあるけれど。

鮫川くんに任せておけば、大丈夫。

「先生？」

不思議そうに、足元の鮫川くんが私を見上げた。私は眉尻を下げて笑う。

私を救助する機材——ジャッキのようなもの——が搬入される間に、あれよあれよと他の乗客たちはバスから降ろされていった。救急車のサイレンも聞こえたから、何人かは既に搬送されているのかもしれない。

「呼び捨てだったよねえ」

「何がですか？」

鮫川くんが届いた機材を折れ曲がった椅子の隙間に手早く挟みながら聞き返す。私は笑って答えた。

「火事のとき。『紬、来い！』って」

「ああ……」

鮫川くんが苦笑する。

「すみませんでした。とっさで」

「ううん。なんか、普通にあのとき、鮫川くん消防士さんだった」

鮫川くんは機材を扱う手を止めない。代わりに男性らしい喉仏が微かに動く。

息を呑んだかのように。

「だからね、さっきも怖くなくなったんだ。鮫川くん来てくれたから大丈夫だって」

鮫川くんは何も答えなかった。

ただ、その耳が赤い。

「それは……そういうのは、助かってから言ってください」

ほんの少し掠れた声に、もしかして照れてる？　と目を丸くしかけたとき、ふっと脚から重みがなくなった。同時に激しい痛みが脳髄まで痺れさせる。

「――――ッ！」

挟まっていたことで、どこか麻痺していたのかもしれない。もしくは堰き止められて

いた血流が一気に流れ込んだせいか。

身体を丸めかけた私の背中を、大きな手のひらが優しく撫でる。

「頑張りましたね」

鮫川くんが私をひょい、と抱き上げた。

声に、視線に交じる労りに、つい目頭が熱くなる。

涙に滲む視界、ひしゃげた窓越しに、すっかり日の暮れた景色が見えた。

赤色灯が闇を貫く。

その赤が、やけに脳裏にこびりついていた。

「熱も下がりましたね。解熱剤飲みました？」

看護師さんの言葉に頷きつつ、血圧を測ってくれている彼女の顔を見上げる。

あの事故の翌々日。

昨日は丸一日、骨折による痛みと発熱とで意識が朦朧としていた。どうやらお母さんが来て荷物を置いていってくれたみたいだけれど、それもあまり記憶にない。

今日になってようやく意識がはっきりしてきて、ギプスをされている自分の現状が把握できた。

足首の骨が折れていたということ、どうやら大部屋がいっぱいで個室に入院できたと

いうこと、最低でも二週間は入院するだろうということ……

「でも、あんな大きな事故でみなさん怪我だけで済んで良かったですね」

同年代の看護師さんが私にそう話を振ったのは、ちょうど午前のワイドショーであの事故について触れていたから。横転したトラックが整備不良だったことで、運送会社に警察が家宅捜索に入ったというニュースだった。

「ほんとですねえ」

どこか人ごとのように返してしまうのは、なんだか事故の記憶が靄がかったかのようにちょっと曖昧だからだ。もしかしたら疲れているのかもしれない、とテレビに視線を戻したとき、ちょうどドラマの再放送が始まった。

「あ、これ懐かしい」

思わずそう言ってしまったのは、十五年くらい前、まだ私が中学生だった頃ものすごくヒットしたドラマだった。今思えばオフィスラブのストーリーはあるあるで、アイドル総出演のようなキャスティングも微妙すぎるのだけれど、当時の私たちは夢中になって観ていた。

大人になったらこんな恋ができるんだろうなって。

「ほんとだ！　懐かしい。そういえばリメイクするんですって」

「えー」

苦笑しながら肩をすくめる。

「今の時代に合いますかね？」

「そのあたりは変えるのかしら。でも主演の女優さん、かわいかったですよねえ」

「分かります……」

私はこくこく頷いた。

「最終回のあれ、流行語になりましたよね。『あなたより大切な人ができたの』」

「あるあるな台詞ですけどね、あの女優さんが言うと妙に色気があってね……」

看護師さんが点滴の機械を確認して、バインダーに何かを書き込みながら目を細めて続けた。

「ま、普通に『妊娠した』って言えよって」

「あはは」

あなたより大切な人、イコールお腹の中の赤ちゃんってことらしい。

看護師さんが「じゃあ何かあったら呼んでくださいね」と部屋を出ていこうとしたとき――コンコン、と部屋のドアがノックされた。

「はい」

答えると、遠慮気味にからからとスライドドアが開く。そこにいたのは、鮫川くんだった。

「え、鮫川くん？」
驚いた顔をしているだろう私に、鮫川くんが頭を下げる。
「体調どうですか？」
「あ、元気」
「元気だったら入院してませんよ」
看護師さんはそうツッコミを入れつつ部屋を出ていった。からから、ぱたん、とゆっくりとドアがスライドして閉まり、室内にはドアの脇で佇む鮫川くんと私だけになる。
鮫川くんは小さな花束を持っていた。向日葵がメインのかわいらしい花束だ。ぱちりと目を瞬く。
「あ」
と、私の視線に気づいたらしい鮫川くんが手の中の花束に目をやった。
「すみません、俺、センスないんで、変かも」
「鮫川くんが選んだお花なの？」
私は受け取りながらつい頬を緩める。
「嬉しい。ありがとう」
「……いえ」
なぜか間をとってそう頷いた鮫川くんに、ベッド脇の丸椅子を勧めた。

「今日はお仕事は？　お休み？」
鮫川くんは椅子に座りながら頷く。
「すぐに来たかったんですが、……ご迷惑かと」
「そんなことないよ。でも今日でありがたかったかも。消防士さんって、三交代制なんだっけ？」
私が言うと、鮫川くんは少し驚いた顔をした。苦笑して続ける。
「ほら、鮫川くんが公務員試験受けるかどうか迷ってたときに調べたの、なんとなく覚えてて」
うちの市の消防士さんは、基本的に三交代制。二十四時間勤務の当番日、勤務明けの非番日、休日のサイクルだ。非番日には会議や研修が入ることもあるらしい。
「調べたときも大変なお仕事だなあと思ったけれど、実際やってみて、どう？」
「大変です。でもしっくりきてます」
その答えに唇を緩めた。やっぱり彼は骨の髄まで「消防士さん」だったんだ。
「それにしても、本当にありがとう。鮫川くんに助けられるの、これで二回目だね」
「そうなりますか」
「三回目はないようにするね」
二度あることは三度、と苦笑すると、鮫川くんがその強面の眉間を思い切り寄せる。

「縁起でもないことを」
「わ、ご、ごめん」
私は少し慌てて謝った。
「救助する鮫川くんだって危ない目に遭うのにね」
「違います、俺は」
鮫川くんが真っ直ぐな目で言う。
「紬先生が痛かったり苦しかったりするのがめちゃくちゃ嫌なだけです」
私は目を瞬(まばた)き、それから微笑みを浮かべた。鮫川くんの変わらない優しさが胸に染みる。
「それにしても、お礼させてね、今度」
「お礼……ですか?」
鮫川くんがキョトンとした。
「二回も助けてもらってるんだもん」
あの予備校の火災のあと、幸いなことに死者はいなかったものの予備校自体が潰れてしまった。どうやらかなりの手抜き工事と消防法違反があったらしい。それで、ただの新卒チューターだった私は予備校の仕事を離れることになり、鮫川くんたち生徒とは連絡が取れなくなってしまったのだ。

いつかお礼したいと思っていた。
そう伝えると、鮫川くんは淡々とした表情で「仕事ですので」と答えた。
「今回はそうだったかもだけど、高校生の頃は違うでしょう?」
「ですが……」
「お願い。ずっと気になってたの」
両手を合わせて笑ってみせると、鮫川くんはその大きな手で顔を覆(おお)い絞り出すように言う。
「なんでもいいんですか」
「いいよ」
「彼氏いますか」
「え?　えっと、いない、けど?」
小首を傾げた私に、鮫川くんが顔を上げてはっきりと言った。
「じゃあ付き合ってください」
「……ん?」
私は聞き間違いかな、とテレビを消す。
「あー。ごめん鮫川くん、もっかいいい?」
「彼氏とか今いないんだったら、俺と付き合ってください」

「どこに」
「そういう古典的なのはいいです。男女交際を申し込んでいます、俺は」
「ええ……？」
戸惑う私に、鮫川くんがゆっくりと話し出す。
「あの火事の日、引っ越しの手伝いに行くって俺が言ったの、覚えてますか」
「え？　あ、うん」
「下心なしで引っ越しの手伝いなんて言うはずないでしょう」
思わず「え」と口が半開きになった。
「あ、あのとき、好きでいてくれたの？」
鮫川くんはなんの照れもなく頷いた。
「初めて人を好きになって……好きで仕方なかったです、本当に……。だから彼氏いるって言われたとき、めちゃくちゃ辛かった」
「そうだったの？」
聞き返しつつ、苦笑いを浮かべる。
「ありがとう、でも、生徒さんと付き合うわけには――」
「『生徒さん』ってなんですか。俺はもう子供じゃない。二十三ですよ」
じっと見つめられ目を瞬いた。

「働いてます。大人です。とっくに酒呑める年齢なんです」
「で、でも私、かなり年上だし……。それに私、鮫川くんのこと、その、ちゃんと男の人だって思ってないところがあって」
「生徒さん」だとしか思ってなかった。
そのはずだ。
「鮫川くん的にも、なんかこう、初恋拗らせちゃったみたいなのがあるんじゃないかな。私六つも上だし、いざ付き合ったらなんか違うとか……」
「拗らせてるのは自覚ありますが『なんか違う』は絶対ないです」
「あると思うよー……あの年頃って、男女問わず年上に憧れるものじゃない？」
「関係ないです」
「ええっと、……あ、じゃあ分かった。吊り橋効果だ」
私はふと思いついてポンと手を叩いた。
「また好きになってくれたってことでしょ？　でもきっと、あんな場面で再会したから」
「……すみません、さっきひとつ嘘つきました」
鮫川くんが立ち上がる。私はどこかぼんやりと彼を見上げた。高校生のときもかなり背が高かったけれど、もっと大きくなっている。百九十近いかもしれない。そんな高さ

から、鮫川くんは私を見下ろしていた。
強い眼差しに射貫かれ、身体が動かない。
「……『好きで仕方なかった』って言いましたよね。あれ嘘です」
「な、なら、なんで」
「好きで仕方ないです。今も。あのときからずっと」
「――え？」
鮫川くんがベッドに膝を乗せた。そう高級ではないだろうベッドがぎしりと軋(きし)む。ぎゅっと大きな手で手を掴まれた。硬い指先が、彼が男なのだと嫌でも理解させてくる。
大人の男性なのだと。
至近距離に彼の整った顔面が迫る。精悍(せいかん)な眼差しに搦(から)め取られて、目が逸(そ)らせない。
頬が熱いのは、なんで？
「とりあえず半年でいいです、お試しで。それでも俺のこと子供だとしか思えないんだったら諦めます」
ふ、と彼が頬を緩めた。
「逃げられると思うなよ」
その微笑みが、視線が、あまりに熱いものだったから。激烈な炎を連想させる眼差しに、私はただ、気圧(けお)されて頷(うなず)くことしかできなかった。

第二章

「え、絶対やめておいたほうがいい。あんたもう二十九なんだよ？」
お見舞いに来てくれた真咲に『あのときの消防士さんと付き合うことになった』と報告すると、返ってきた反応がこれだった。
「相手二十三なんでしょ？　ていうか元生徒？　やばくない？」
「そう……かな」
「いやまあ、元生徒ってのはひとまず置いておいてよ。お互い成人してるしね？　でもさ、紬、結婚願望あるじゃん。子供欲しいって言ってなかった？」
「……言ってた」
「向こう、今は絶対その気ないじゃん」
そう言われて眉尻が下がる。
それはそうだと思う。鮫川くんにとって結婚も子供もまだまだ先の、想像さえしていない未来なのだろう。
三十歳手前の、私とは違う。

「でもなんか、こう、気圧されちゃって、押し負けしてしまって」
「バカじゃん」
うっと言葉を呑む。
バカ……なのかもしれない。でも、と思い出す。鮫川くんのあの熱い双眸を――
抵抗なんて、できなかった。
「好きなの？」
「……分かんない」
「紬って好きじゃないと絶対エッチできない人じゃん。大学のとき告白されて押されて付き合った人、ヤらせてくれないからってフラれてた」
「……ちゃんと好きでもないのにそういうことするの、その、抵抗が……」
「その鮫川くんとやらとはヤれるの？」
「……だから、分かんないって」
「しょーがないなあ。そんな紬ちゃんにオトコ紹介してあげるよ。年上の、テレビ局勤務」
「へ？」
私はキョトンと真咲を見る。それから慌てて首を振った。
「ま、真咲！　何言ってるの。だから私、鮫川くんと」

「そんなでいいの!?　相手の青春の思い出に付き合って婚期逃すの？」
「思い出？　鮫川くんはそんなんじゃ……」
今も好きだって、そう言ってくれていた。
「だから半年後、あんたたちが別れたらいい人紹介してあげる」
あっけらかんと真咲は言い放つ。
「別れるの前提なの？」
「別れると思うなあ」
真咲が呆れたように肩をすくめた。

鮫川くんは「当番日」以外は毎日お見舞いに来てくれた。あまりにも来るものだから、看護師さんに「ラブラブですね～」なんて声をかけられる始末。
大事にされてるっぽいなあ、と思う。
本当に好きなんだな、私のこと。
……と思うと、さすがにドキドキしてしまう。
窓の外では満開の桜がちらちらと散っていた。
「鮫川くん、今日は非番？」
「はい。午前中は研修だったんです」

鮫川くんはそう言って視線を落とす。
「どうしたの？」
「女性が喜びそうなものが分からなくなって」
「……？」
「何も持ってきていないんです」
「え？」
ぽかんとしながら、シュンとしている大型犬みたいな鮫川くんを見つめる。
「お見舞いなのに」
確かに連日、お見舞いに来るたびに彼は何かしらを差し入れてくれていた。
「え、わ、そういうこと？　気にしないで！」
ほぼ毎日来てくれてるのに、と言うと、鮫川くんは首を振る。
「何か食べたいものはありますか」
今すぐ買ってきますという顔で尋ねられ、私は慌てて手を振った。
「だ、大丈夫だよ!?」
「でも」
鮫川くんはものすごく生真面目に眉根を寄せる。
「あは、いつも何かしらいただいてるし。顔見せてくれるだけで十分だよ～」

「……甘えてもらえると嬉しいのですが」
犬みたいな目でじっと見つめられた。大型犬だ……。これ、セントバーナードだ。
「彼氏なのに」
「か、彼氏」
「恋人なのに」
「恋人」
「甘えてもらえないの、悲しいです」
どうしよう。鮫川くん、どっちかと言うと強面なのに、なんでそんなかわいい顔ができるの？　正直、キュンとしてる。これは多分、鮫川くんが求めている「大人の男性」への感情じゃないと思うけど。
「た、たこ焼き……？」
とっさに思いついたのが、それしかなかった。
たこ焼き。なんでもっとかわいい食べ物にしなかったんだろ？
「たこ焼き、了解しました」
鮫川くんはバッと立ち上がり、長い脚で颯爽と病室を出ていく。
それをぽかんと見送ってから、窓の外に視線を移した。見下ろす病院の庭には、満開の桜。

「もうちょっとお花見とかしたかったなー……」
まあ、これもお花見といえばお花見、なのかな？
はらはらと桜の花びらが散っていく。
私はぼんやりと、しばらく桜を眺めて過ごした。退院の頃には、もう葉桜になりかけだろうな。
葉桜も、好きだけれど。
すこし残念に思っていると、背後から声がした。
「お花見しますか」
鮫川くんだった。桜に見入っていたせいか、戻ってきていたことに気がつかなかった。
「そりゃ、やりたいけど……っていうか、コンビニに行ったんじゃなかったの？　その袋」
どこまで買いにいっていたんだろう？　てっきり近くのコンビニとかかな、と……。
冷凍のを買えば、談話室にレンジがあるし。
「ちょうど駅前に移動販売の車が来ていたなと思い出して」
「あー、たまに来てるよね……って、結構遠いよね。鮫川くん、今日車とかで来てた？」
「いえ、徒歩で」
歩いた……？　いや、駅まで歩いてこの時間じゃ戻ってこられない。てことは走っ

立ち読みサンプル
はここまで

た!?
それで往復して、全然息も上がってないなんて……！
「さ、さすが消防士さん」
「まだ熱いので気をつけてください」
鮫川くんが恭しい仕草で白い容器を渡してくれる。
ふんわりとソースの香り。
あ、私、味が濃いのが食べたかったのかぁ……。病院食が健康的すぎたかな。
自分の欲求に気がつくの、いつもワンテンポ遅いんだよな。
お礼を言って容器を受け取り、パックを開こうとした矢先、ふわりとした浮遊感。
「……!?」
一瞬、状況が理解できなかった。
私、お姫様抱っこされてる！
「お花見しましょう」
逞しい腕で私をがっちりと支え、鮫川くんは淡々と言う。
「お、お花見……ッ!?」
鮫川くんは堂々と、私をお姫様抱っこしたまま歩き出した。
「さ、鮫川くん？」